

戦後の京城女子師範学校卒業生の同窓会活動

広* 瀬 貞 三

はじめに

植民地期の朝鮮在住日本人（以下、在朝日本人とする）は、一九四五年八月の敗戦とともにその多くは日本に引揚げた。近年は引揚げ・復員に関する史料編纂が急速に進んだ。¹ これとも関連し、多くの研究の蓄積が見られる。最近の研究動向として、大日本帝国の崩壊を人の再移動として把握したり、アジアの地域秩序の再編と関連付けたり、戦前と戦後の「断絶」を越えてそこに連関性を見ようとする研究等も出ている。²

朝鮮からの引揚げ者は戦後の日本で、地域単位、組織単位、学校単位、職業単位、軍隊単位と同窓会組織を作って

*福岡大学人文学部教授

活動した。朝鮮総督府高官経験者らは、中央日韓協会（同和協会の後身）を組織した。学校関係は、京城師範学校の醇和会、京城女子師範学校（以下、京城女子師範とする）の明鏡会、羅南高等女学校の葉月会、京城中学校の京喜会等がある。地域としては、全国清津会、羅津若草会、新緑会（新義州）等がある。こうした同窓会組織は、戦前と戦後を「継続」する在朝日本人の諸活動と見ることができる。では、同窓会組織は具体的にどのような活動を行ったのか。何が彼らを戦後の日本で強く結びつけたのか。長く同窓会の活動が続いた理由は何なのか。彼らは同窓会活動にどのような思いを抱いたのか。

本報告では、こうした問題意識を背景に、事例研究として京城女子師範を取り上げ、戦後の同窓会活動の実態とその特徴を明らかにしたい。京城女子師範については植民地期の学校生活の実態解明のためにアンケート調査が行われている。また、朝鮮での生活や引揚げに関する聞き取り調査がなされている³。しかし、戦後の同窓会活動それ自体に関する先行研究はない。史料としては京城女子師範の同窓会が作成した明鏡会の名簿『明鏡』、会報『明鏡だより』、尋常科八期生の会報『清涼』、明鏡会本部編『めいきょう』第一集（同会、一九八〇年）、明鏡会本部『戦後明鏡会のあゆみ』（同会、一九九五年）等を主に使用する。

一・京城女子師範学校の設置と敗戦

(1) 京城女子師範学校の設置

京城女子師範は一九三五年四月に開設され、当初は尋常科（四年）、演習科（二年）（一九四三年に本科に改称）、講習科（一年）の三科を置いた。尋常科は尋常小学校卒業者を対象とし、演習科・講習科は高等女学校、女子高等普通学校卒業者等を対象にした。尋常科は二クラスで百名、演習科は四クラスで一九五名、講習科は一クラスで五〇名だった。初代校長は高橋濱吉、教員は一九名だった。一九三五年時点で七クラスが置かれ、学生は合計三四五名だった。このうち、朝鮮人は二〇五名（五九・四％）、日本人は一四〇名（四〇・六％）だった。父兄の職業の上位三種を見ると、朝鮮人は公務自由業七八名（三八・〇％）、農業七三名（三五・六％）、商業三二名（一五・六％）であり、日本人は公務自由業七七名（五五・〇％）、農業二二名（二五・七％）、商業二〇名（二四・三％）だった。日本人と朝鮮人を比較すると、公務自由業は日本人が一七・〇％高く、農業は朝鮮人が一九・九％高かった。朝鮮人の原籍は、京城が三一名、全北が二三名、黄海が二二名、京畿が一九名、慶南が一六名だった。学内には、二つの寄宿舎（精華寮、済美寮）を置いた。京城女子師範は「方針七則」を立て、「一・国体ニ関シ明徴ナル觀念ト確乎タル思念トヲ啓培シ帝国々民タルノ志操ヲ鞏固ナラシムルコト」、「一・一視同仁ノ聖旨ヲ体認シ桑椹渾然一体トナリ東亜ノ指導者タルノ気魄ヲ養フコト」、「一・教育ニ対シ深厚ナル興味ト熱烈ナル児童愛トヲ喚起シ天職ヲ悟了セシメ特ニ女性独自ノ使命ヲ自覚セシムルコト」⁴などを明らかにした。

一九四三年四月に京城女子師範に入学した野村寿美子（講習科九期、一九四四年卒業）は在校時代の思い出を、「赤煉瓦校舎での授業、日曜日の食糧あさり、寮でのおこげおやつ、清涼台でのいこいのひととき、鐘岩での教生実習、はじめて体験した零下十八度の中での校門の雪かき作業等わずか一年間の京城での生活にも、思い出はつきない」と語っている。

京城女子師範は一九四四年八月に「決戦の真唯中半島に徴兵制創設の一周年記念日を迎へ、「神兵今ぞ米鬼を撃つ」の闘魂熱鉄と燃える意義深き日に当たり」として、『国民教育実践の根基』を刊行した。この本は、「皇国教育の淵源として昭々万古に輝く三大神勅をはじめとし奉り国民教育戦士の絶対謹行すべき聖訓を謹輯」したもので、法規編、実践編、時局編、参考編、追補編などが盛られている。

（2）在校生と卒業生の敗戦

一九四四年になると、教員は教官とよばれ、在学生の学年、学級の名称も軍隊式になった。本科の一年三組は「本科一年第三小隊」と呼ばれ、学級は小隊、学年は中隊、学校全体は大隊と称した。荻原昭子（本科三期、一九四五年二年在学）は勤労奉仕の状況を、次のように回想している。「勤労奉仕としては飛行機の絶縁につかう雲母はぎ、雲母の粉が舞い健康に悪いとのうわさでもちきりでした。でも、雲母はぎをすると小さな、ふかしパンの特配がありました。（中略）又京女師は広い農場がありました。その農作業が一番きつい労働でした。炎天下の作業に、農場の真中を流れる川の水を我先に飲んで安岡校長に叱られた思い出があります。（中略）私達もいざという場合、野戦看護

婦として動員されるとの事で、京城帝大に看護実習に行きました⁸。このように敗戦直前は学業ではなく、勤労作業の比重が高まった。

八月一五日の敗戦に伴い、京城女子師範では大きな衝撃が走った。森下昭子（本科三期生、一九四五年二年在学）は勤労動員で黄海道の沙里院に戻る予定だった。しかし、鉄道の切符が入手できずに、それは不可能になった。森下は翌一六日に京城女子師範に行った。「本日で京城師範学校は閉鎖です。集団下校して下さい」という校内放送があり、閉鎖が告げられた。「下校時は方面別に兵隊が一名ずつ付き添ってくれましたが、先住者である朝鮮半島の子ども達が我々に向かって石を投げ付けてきました」と回顧している。大谷マツヨ（尋常科八期生、一九四五年四年在学）は、「学徒動員の歌声におくられて、大道場を涙ぐんで出たわたしでしたが、それがこんな永い別れになるうなどは、それこそ神ならぬ身の知る由もなく、動員先で知った終戦の重み。ペタツと腰かけにたおれこんだなり、「神国なれば敗れず」。そのことばをつぶやきつづけたのでした¹⁰」と後に回顧した。熊谷佳子（尋常科九期、一九四五年三年在学）は学校の農場で農作業中だった。教室で玉音放送を聞いた。「だんだん時間の経過とともに外が騒がしくなり、校庭に朝鮮の男子専門学科の生徒が押しかけ、マンセー、マンセーと連呼、国防色一色だった校舎から見ると町の色は白く変わり、電車は鈴なりの人ばかりでした¹¹」という。校舎には朝鮮人の男子学生が「朝鮮独立、マンセー」と叫びながら入ってきた。朝鮮人の学生は一斉に窓際に駆け寄り、これにハンカチを振った。一人の朝鮮人学生がこれを批判すると、ハンカチを振った朝鮮人学生たちはその学生を殴る事件が起きた¹²。

卒業生は朝鮮各地で教壇に立っており、そこで八月一日を迎えた。川崎義子（尋常科三期、一九四一年卒業）は平南江東郡の勝湖里公立尋常小学校に勤務中だった。「八月十三日、ソ連軍の襲撃を避けて関東軍と満鉄の家族が疎開？避難して来ました。四百人の日本人家族の所へ千五百人が非難して来たのですから宿泊は一先ず学校で、食料のことは軍人家族と一般家族との軋轢、いろいろと大変なものでした。もうすでにこの時から敗戦の兆しは感じられました。八月十五日、終戦¹³！」と回顧している。杉山とみ（演習科六期、一九四一年卒業）は大邱師範学校付属国民学校で勤務中だった。杉山は「無条件降伏―それがどんな意味をもつものか、すぐにはこれといった実感はない。しかし地雷に燃え進む導火線を見ているような緊迫感が、誰の胸にもじわじわと拡がった。ある一瞬を境に他国、他民族となった現実。思ってもみなかった民族相互の厚い壁がく然としながらも、私は韓国の人たちへの親近感を見失いたくなかった¹⁴」と回顧している。古橋利子（尋常科六期、一九四四年卒業）は京城南大門小学校に勤務中だった。四年生を担当し、疎開を目前にしていた。古橋はそこで玉音放送を聞いた。古橋は日記に、「報道は終わった。しかし、立ち去る者はいない。しばらく沈黙が続く。杲然として眼前闇の如く、死の海の如く。「さあ、皆さん引揚げましよう。」力無い教頭の一声に、一同うなだれたまま立ち去る。職員室に戻ってもただただ沈黙。敗戦国、無条件降伏。何たること、何たる屈辱¹⁵！」と書いた。高島保子（本科二期、一九四五年卒業）は、忠清北道の美江里の国民学校に勤務中だった。高島は、「あの日：校舎裏は一面の夏草でした。その草いきれの中に茫然と一人立ち尽くしていました。「何と云うことだ：」幾度も心の中で叫びながら、あふれ出る涙をどうすることも出来ませんでした。日が落ち、何

処からともなく沸き起こる歓声、蛍の光のメロデーにのって歌声は刻々と高まり、（後にそれは新国歌であったと聞きました）夜毎不穏な形勢は村中を押し包み、不気味に拡がっていったのです¹⁶と回顧した。野村寿美子（講習科九期、一九四四年卒業）は、大邱寿公立国民学校に勤務していた。彼女は「そして運命の八月十五日がやってきた。空襲警報発令に、いつもと同じ防空頭巾に、非常袋の出でたちで登校の途中、重大放送に接した。よく内容はわからぬままに学校に着いてみると異様な雰囲気¹⁷」と回顧した。

在校生、卒業生はその後、混乱の中、各自で朝鮮から日本へと、困難な引揚げの道についた¹⁸。

二・明鏡会の結成とその展開

（一）明鏡会の結成

敗戦とともに京城女子師範の卒業生・在校生は日本へ引揚げた。こうした人々は帰国直後から同窓会組織の設立に向けて、諸活動を続けた。一九四六年二月に初の同窓会の集まりが、福岡県久留米市（福岡女子師範学校寄宿舎）で開かれた。もともと福岡市内にあった福岡女子師範学校の校舎は一九四五年六月、空襲により炎上した。このため、同年一二月、久留米市内の予備士官学校跡を入手し、一九四六年一月に福岡女子師範学校の学生がここに集合したのである。京城女子師範の卒業生・在校生は福岡女子師範学校に一名転入していた¹⁹。これに続いて、一九四七年八月に第一回福岡市明鏡会（聖福寺境内の高砂寮）が開かれた。聖福寺境内には外務省傘下の在外同胞援護会、同会の救

療部聖福病院が設置されており、この中に卒業生がいた。²⁰福岡県内のこうした動きの結果、一九四九年八月に福岡明鏡会が設置された。

一方、一九四九年秋には、東京都で初めて明鏡会の集まりが行われる。その後、明鏡会は広島県（一九五七年一月）、大分県（一九五八年二月）、長崎県（一九六〇年、月は不明）、佐賀県（一九六五年一月）、東京都（一九六五年八月）と、西日本から順次地方組織が設置された。一九六五年八月には、第一回九州大会が開催された。²¹次第に生話が安定するに伴い、組織は拡大し、全国組織の明鏡会を設立する動きが加速した。名簿作成にあたっては、堀越恭子（尋常科三期、一九四一年卒業）の役割が大きかった。堀越は引揚げ後、外務省の朝鮮関係残務整理事務所で関係者の残務整理をしていた。「連日届く皆さんの帰国届けの書類を見て、あああの方も無事に帰ってこられた、この方もあそこにいらっしやるとなつかしく思い、その思いを何かの形でまとめたいと考えたのがきっかけでした。（中略）帰国届の書類の中から、女子師範出身と覚しき人を写し、葉書を出して回答のあった方のみを名簿にまとめてみました²²」という。

（2）明鏡会の全国大会開催

明鏡会は一九六八年八月、第一回全国大会を大分県別府市で開催した。参加者は約一三〇名で、本部を福岡県に置くことを決定した。また、全国を六ブロックにわけ、責任者を決定した。これ以降、ほぼ三年おきに全国大会を日本各地で開催した。²³明鏡会の全国大会開催地と参加者数は、表1の通りである。支部（九州、近畿、関東、中国、四

国)が中心になった場合や、県(熊本、岡山、京都、福岡)が主催になった場合もある。参加者は第一回の一三〇名から第二回には三一五名と二・四倍に拡大した。しばらくは二〇〇名台が続いたが、第七回(一九八六年)には四〇〇名、第八回(一九八九年)は五七七名と最高を記録した。また、第六回(一九八三年)から韓国人会員の参加が始まり、第八回(一九八九年)には最高の八四名が参加した。

岡本文子会長は、明鏡会は「唯一、最大の行事は全国大会」であると位置付け、「母校を失いました私共には、三年ごとに廻りくる大会こそ、京城女子師範学校の象徴であると申してもよろしいのではないでしょうか。女子師範の卒業であるという誇りが、会場に一つになった時、心は自然と青春時代を過ごした学び舎を駆け廻っております(中略)かつて学びました明鏡魂が血となり肉になって染みついておりますことが遺憾なく発揮され、参加者一同、感激と歓喜に没入出来ましたことが何よりの証拠であります」と、全国大会開催の積極的な意義を述べた。²⁴

同窓会は同窓生だけでなく、当時の教師、先輩、後輩も出席する「擬似学校の空間」であるという。²⁵京城女子師範の明鏡会の場合、朝鮮と母校を失い、全国大会こそが青春と学校生活を回想する唯一の道だった。一九九八年一月に開催された第一一回全国大会(福岡)の式次第を見てみる。実行委員長挨拶、会長挨拶、物故会員に対する黙禱、恩師紹介と記念品贈呈、議事(経過報告、会計報告、特別委員会報告、明鏡会活動の今後)、明鏡会全国大会をふり返って、校歌合唱、閉会のことば、となる。その後、懇親会が始まり、宮廷舞踊(韓国会員有志)、のんこの踊り(長崎支部)、博多どんたく踊り(会員一同)が行われた。²⁶故郷と校舎を失った会員にとって、特に母校を象徴するのは、

表1・明鏡全国大会の開催地・参加者（1968～1998年）

回	年	開催地	担当	会員	韓国人	恩師	会員外	合計
1	1968	別府	九州	130	0	不明		130
2	1971	大阪	近畿	288	10	27		315
3	1974	熱海	関東	250	0	17		267
4	1977	下関	中国	279	0	26		302
5	1980	徳島	四国	213	0	21		237
6	1983	仙台	東北	254	26	17		297
7	1986	熊本	熊本	409	17	21		447
8	1989	岡山	岡山	493	84	19	5	577
9	1992	京都	京都	421	63	13		497
10	1995	東京	関東	379	25	25		404
11	1998	福岡	福岡	不明	不明	不明		543

明鏡会『戦後明鏡会のあゆみ』（同会、1995年）頁数なし。明鏡会『明鏡だより』各号から作成。

恩師と校歌だった。名簿『明鏡』には、巻頭に校歌（北原白秋作詞、山田耕作作曲）と恩師の名簿が掲載された。

一九八〇年代後半になると、韓国では海外旅行が自由化された。これにより、一九八九年九月の第九回全国大会（岡山県）には韓国人が八四名参加した。韓国人の一人は、「忘れかけた旧友のなつかしい顔々。何年も使わなかった日本語。挨拶の言葉もどもり、どうにか口が利けるかと思ったら、もう分かれの時間。御健康にいらっしゃる恩師の方々はじめ、日本の皆様お元気で御幸福で」と、再会を懐かしむ意見もあった。しかし、一方では植民地支配の傷跡を日本に見る意見もあった。韓国人の一人は、「北海道の畑では、時々開拓者の遺骨が出るというガイドの話。第二次大戦の時、韓国から日本に徴用され、北海道の炭鉱でなくなられた方も多い筈。真心をこめて冥福を祈った」という。

表1のように、明鏡会は三〇年間に二回の全国大会を開催した。しかし、第一一回大会が最後の大会となった。二〇〇七年九月、明鏡会本部は二〇〇七年度で解散することを決定した。解散の理由は、会員の高

齢化にあった。松田和子会長はその理由を、「本部役員の大半は八十歳を越え、会の運営も厳しくなつて参りました。一時期千三百人を擁した会員は先生方を含め現在約九百名となつてしまいました。活動に齟齬を来たさないうちに」と考えた結果の決断で「ごさいます」とした。松田の言葉には、京城女子師範は「内鮮一体を目標とする国の植民地政策のもと」で設立されたとの文言がある。「内鮮一体」、「植民地支配」の文字が「明鏡だより」に掲載されたのは、これが初めて、最後だった。³⁰

(3) 日韓交流の開始と活発化

一九四五年八月以降、京城女子師範の卒業生・在校生は日本、韓国、北朝鮮と所在地を異にした。この中で、日韓の間で卒業生間に連絡がつき、日韓の相互訪問が始まる。一九六六年一月に高永宝（尋常科八期、一九四五年四年在学）から元教師中島モモエの元に手紙が届いた。中島は一九六七年二月に韓国人卒業生の招待を受け、ソウル市を一〇日間訪問した。これを韓国人卒業生三五名が歓迎した。中島は韓国人卒業生からの歓待を受けた理由を七点あげている。第四点には、「生徒の年齢は十三歳から十八歳くらい、最も感受性の強い時期に当たっており、また朝鮮全土から選ばれ、難関を突破して入学した優秀な頭脳の持主ばかりで、すぐれた吸収力・記憶力を持っていた。従つて、授業の時や平素、わたしの言ったこととしたのはしばしが、驚くほどの鮮明さで心に刻み込まれていた」と、指摘した。³¹

これに続き、一九七一年八月の第二回全国大会（大阪）に韓国人卒業生一〇名が元教師中島モモエの招待により来

日し、特別に参加した。³² 韓国側の文純会長（尋常科四期、一九四二年卒業）は、京城女子師範について、「立派な学校ではありましたが、戦争終了と同時に新生韓国の新しい教育機関にその役割を引き継いだ後、今は歴史的使命を果たした記念碑となりました。（中略）その名は老兵の如く消え行きましたが、その功績と役割は不滅の塔の如く永遠に残りましょう」と挨拶した。³³

日韓の交流拡大に伴い、日韓会員の往来が活発化していく。一九八四年八月明鏡会韓国訪問ツアーが行われ、第一回韓日合同大会をソウル市で開催した。日本からの参加者は多数にのぼった。一日目は新羅ホテルで韓国側の総会が開催され、二日目は観光コースに組み入れてあった母校跡を訪問した。すでに校舎や寮はなくなっていたが、唯一残る清涼台跡を見学した。³⁴ 一九九三年一〇月には「韓国明鏡会総会、及び大田 EXPO 九三」参加行事が行われた。参加者は韓国人が二六〇名、日本人は教員三名、会員五三名だった。引揚げ以来、初めて韓国・ソウル市を訪問した日本人会員もいた。一日本人は「在韓中は懐かしい友達への歓待を受け感激しました。昔ながらのソウル駅を見た一瞬少女にかえり、白馬江の流れに日韓の深い繋がりを思いました。やがては私は生育の地東草を訪ねたいと思います」と述べた。また、別の日本人は「ソウル生まれの私は四十年振りに故郷の大地に立つことが出来た。盛大な心あたたまる総会、貴重な時間を削いてのクラス会等々、皆六十年代の年を重ねたが皆様のお顔を見てみると、乙女時代の面影が残っていて嬉しく思った³⁵」と語った。

こうした交流拡大の流れの中で、一九九七年五月に第一〇回明鏡会全国大会兼第二回日韓合同大会が横浜市で開催

された。この時にスローガン「友情は国境をこえて」が初めて登場した。この背景には、「明鏡は、他校の同窓会に較べてひと味違う会であると思う。それは、国境を越えた友情と互いの信頼が深い絆となって固く結ばれているからだ」と信じている。この明鏡会の精神が、永遠に私達の心の中に行き続けることを願っている³⁶との思いがあった。日本人だけの明鏡会は日韓交流拡大の中で、韓国人会員の立場を思いやる精神的な余裕が生まれたといえる。また、同年同月、『戦後明鏡会のあゆみ』が刊行された。刊行の意義を松田和子会長は、「ふり返れば戦後五十年、今年はこの節目の年であります。明鏡会も年毎に新会員の加入を加え、お蔭様で、現在の会員は一千三百余名を数え、ここに発展の姿を見ることが出来ます。(中略) この年に当たり、戦後の明鏡会の歩みを明らかにして、その足取りを確かめることは、今年度の本部に課せられた重要な課題の一つでありました³⁷」と述べている。ここには明鏡会の活動を日本現代史の中に位置付けようとする、明確な歴史意識が見られる。

(4) 博多港引揚祈念碑建立・引揚資料館建設の請願運動

一九八七年から福岡市で「博多港に引揚記念碑・資料会館を建設し、その一帯を公園として整備して、そこに母校名の植樹を求める請願」運動が始まった。これに一九九三年から京城高女の白楊会、京城同窓会（在京城中学校・女学合同会）が参加し、一九九四年四月から福岡支部が運動に参加した³⁸。全国の会員から八五〇〇名の請願署名をもらい、福岡県支部に特別委員会を設置した。特別委員会には、村松雅枝会長（初代明鏡会会長）、熊谷佳子副委員長、委員二名を置いた。この運動は成功し、一九九六年三月に引揚記念碑が完成した。一九九八年三月に六本の植樹がなさ

れ、植樹式が開催された。樹木六本は「引揚を考える集い」の六団体である、第一高女（白楊会）、羅南高女（葉月会）、京城女子師範（明鏡会）、仁川高女（白楊会）、木浦高女（わか葉会）、郡山在住者（月明会）を象徴した。⁴⁰ ただし、「資料館建設」は次の課題となった。

一九九九年一月、明鏡会本部は「引揚博多を偲ぶ集い」（福岡市博多港引揚記念事業実行委員）に祝電を送った。その内容の中には、「遠く外地で敗戦を迎え、祖国に帰ることも叶わず亡くなっていった多くの同胞を思うとき、ここに生きて祖国の土を踏むことができた私どもはなんと幸せなことでありましょう。それ故にこそ長く後世に伝えなければならぬ」という使命感を痛感しております⁴¹と、引揚げの顕彰を強調した。

（5）「閔釜裁判」への支援

明鏡会全体の活動ではないが、重要な活動として卒業生の一人である杉山とみ（演習科六期、一九四一年卒業）が「釜山従軍慰安婦・女子勤労挺身隊公式謝罪等請求事件」（以下、「閔釜裁判」とする）に証人として法廷に立ったことをあげる。杉山は一九四一年四月から慶尚北道・達城国民学校の教員だった。ここで四年生として担当した生徒の一人である朴小得が、「閔釜裁判」の原告の一人として日本企業の不二越を提訴した。朴小得は一九四四年三月に達城国民学校を卒業し、同年五月、同校教員の守屋などから日本への勤労働員を強制され、満一二歳で一九四四年五月から不二越富山工場に女子勤労挺身隊として動員された。朴小得らは過酷な労働、食料不足、病氣、空襲の危機など多くの困難に直面した。⁴²

一九七九年四月、第一八回口頭弁論において、杉山は証人尋問を受けた。杉山は一九四四年一月から三月まで京城女子師範本科研究生であったが、被告らが女子勤労挺身隊として動員された皇民化教育の背景、実態等を説明した。⁴³ 杉山はこの報告集会において、「戦後、自分は文化における戦争犯罪者だと思い、二度と教職につかないつもりだった。戦後の教員不足の中で意に反して復職してからもずっと心に残っていて、日韓親善のお手伝いをしてきた」と語った。戦後補償裁判で、当時関係した日本人が証言したのは初めてだった。⁴⁴ 後に杉山は「文化における戦争犯罪者」の背景を、「戦争に同調し、純粋な韓国人の子どもたちを無理に日本人にしようとした皇民化教育、その誤りをどのように戻せば良いのか、答えが探せずにいた」と語っている。⁴⁵ 京城女子師範の卒業生として朝鮮の教壇に立った多くの同窓生の中で、杉山は朝鮮人の子女に対する明確な加害者意識を持っていた。

朴小得ら女子勤労挺身隊七名の「閔釜裁判」は一九九八年四月の一審、二〇〇一年三月の二審、二〇〇三年四月の最高裁と、いずれも敗訴に終わった。⁴⁶

三・明鏡会の組織と運営

(1) 明鏡会の本部と会員数

明鏡会は一九六八年に第一回全国大会（別府）を開催した。決定事項としては、①本部を福岡に置く、②役員（会長、会長補佐、副会長、書記会計、監事）を置く、ことの二点だった。⁴⁷ その後、一九七四年八月から本部を東京に移

表2・明鏡会の歴代会長

代	氏名	旧姓	所 属	任期	支部
1	松村 雅枝	佐々木	演習科3期(1938年卒業)	1969年8月～1974年8月	福岡
2	皆川千代子	塩 毛	尋常科1期(1939年卒業)	1974年8月～1980年8月	関東
3	岡本 文子		尋常科3期(1938年卒業)	1980年8月～1989年1月	関東
4	松田 和子	小 野	尋常科8期(1945年4年)	1989年1月～2008年12月	関東

「年表」、明鏡会『明鏡会のあゆみ』(同会、1995年)12～32頁から作成。

表3・名簿『明鏡』掲載の会員数(1968～1992年)

号数	年	数
1	1968	878
2	1971	1,074
3	1974	1,174
4	1977	1,124
5	1980	1,157
6	1983	1,183
7	1986	1,268
8	1989	1,306
9	1992	1,359
10	1998	1,312

明鏡会『戦後明鏡会のあゆみ』(同会、1995年)頁数なし。
明鏡会本部『明鏡』11号(同会、1998年)。

明鏡会は組織の活性化とともに、会員数が拡大した。表3は名簿『明鏡』に掲載された会員数である。一九六八年に八七八名から開始した会員数は、一九九二年には最高の一三五九名となった。しかし、一九九八年には四七名が減少し、一三一二名となった。その後は会員の高齢化に伴い、次第に会員数は減少し

した。⁴⁸ 歴代の会長は、表2である。初代の村松雅枝から二代の皆川千代子に交代すると同時に、本部も東京に移った。所属でわかるように尋常科が中心であり、皆川から三代の岡本文子へ、さらに四代の松田和子へと若返りが図られた。

明鏡会本部は大きく見ると、二つのことを行った。第一には、名簿を管理・作成して『明鏡』を刊行した。同窓会名簿である『明鏡』は三年置きに刊行され、合計一一冊を刊行した。第二には、会報『明鏡だより』を発行した。『明鏡だより』は二号(一九七一年一月)(二号は発行年月不明)から一一号(二〇〇〇年八月)まで、不定期に十一号が刊行された。

表4・支部別・県別の会員数
(1998年)

支部名	県名	数	数 (%)
北海道			11(0.8)
	東北		59(4.5)
	宮城	28	
	秋田	5	
	青森	4	
	福島	14	
	岩手	4	
	山形	4	
関東			277(21.1)
	東京	114	
	神奈川	57	
	千葉	43	
	埼玉	27	
	茨城	11	
	群馬	10	
	栃木	15	
中部			84(6.4)
	愛知	34	
	静岡	17	
	長野	18	
	岐阜	8	
	山梨	7	
北陸			39(3.0)
	富山	9	
	福井	8	
	石川	13	
	新潟	9	
近畿			153(11.7)
	大阪	63	
	兵庫	32	
	京都	22	
	奈良	17	
	和歌山	10	
	三重	5	
	滋賀	4	
中国			197(15.0)
	広島	67	
	山口	57	
	島根	28	
	岡山	36	
	鳥取	9	
四国			71(5.4)
	高知	21	
	徳島	15	
	愛媛	20	
	香川	15	
九州			415(31.6)
	福岡	156	
	長崎	50	
	大分	52	
	佐賀	44	
	熊本	60	
	宮崎	25	
	鹿児島	28	
国外			6(0.5)
合計			1,312(100)

明鏡会『明鏡』11号(同会、1998年)から作成。

ていった。明鏡会が二〇〇八年一二月に解散を決定した時点での会員数は約九百名だった。⁴⁹
(2) 各地方別・県別の支部活動

明鏡会の組織を、最後の名簿『明鏡』(一九九八年)から見てみよう。表4が支部・県別の会員数である。明鏡会は北から、九支部(北海道、東北、関東、中部、北陸、近畿、中国、四国、九州)を置いた。支部の中では、九州支部の割合が最も高く三一・六%、次いで関東が二一・一%、中国が一五・〇%、近畿が一一・七%、中部が六・四%となる。九州、中国、近畿と、西日本の会員数が多いのが特徴である。県別で見ると、上位は福岡が一五六名(一一・九%)、東京が一二四名(八・七%)、広島が六七名(五・一%)、大阪が六三名(四・八%)、熊本が六〇名(四・六%)である。福岡は引揚げ地である博多港があったことも関連し、一県で全会員の一一・九%を占めた。

各支部・県別で全国大会を主催することは、支部・県在住会員の協力・活性化につながった。一九八九年九月に第八回全国大会（岡山）を開催した岡山開催準備会は、準備の模様を次のように述べている。「第一回準備会は、去年（一九八八年＝広瀬）の九月二十五日でしたが、その前に予備的な会合を二回やりました。最終的な会合は前日の九月二十七日で、それが七回目でした。この間に準備委員会の準備会を十二、三回やっています。電話は交渉、買い物などの回数は、もう忘れちゃうほどたくさん⁵⁰。また、一九九二年一月に第九回全国大会（京都）を開催した京都府の会員は次のように語っている。「京都に住んでいてもほとんど初対面の人ばかりだし、大会は先のことと、正直余り気が進まなかったのですが」「事前の会合は十七回延べ人数百三十名、回を重ねることに皆の熱意が盛り上がり、丸山委員長の人柄にひかれて、大会を成功させようと思えました」⁵¹、「大会が終わった今、スタッフ一同が心一つにして頑張ったという充実感に浸っております」という。

（3）同期生の活動

尋常科、演習科、本科、講習科の同期生たちは各自で各種の会合を持つ一方、定期刊行物を発行した。尋常科一九四三年は「アカシア会」、尋常科一九四四年は「たんぼげ会」、演習科一九四三年は「ひとは会」、本科一九四四年は「いくよよ会」、本科一九四五年は「はたち会」である。思い出深い地である「清涼」をつけたのは、尋常科一九四五年四年在学、尋常科一九四五年三年在学であり、尋常科一九四五年は回覧ノートを活字にする時に「青雲ますむ」とした。⁵²

表5・尋常科8期生（1945年4年在学）の名簿

番号	氏名	住所(県)	戦後の足取り
1	A 佳子	鳥根	
2	A 典子	愛知	結婚、主婦
3	I 繁子	高知	中学校教員、小学校教員、
4	U 昭子	愛知	結婚、夫は死亡、子供は5人
5	O 光枝	千葉	会社員、結婚
6	O マツヨ	埼玉	松江高女に編入、会社員、結婚、子供は2人、夫は朝鮮からの引揚者
7	K 咲子	千葉	保健婦、結婚、子供は1人
8	K 喜美	高知	県庁に勤務
9	K 昭子	福島	結婚、子供は2人
10	K 道子	広島	結婚、養鶏業
11	K 三重子	佐賀	結婚、主婦、夫は県庁に勤務、子供は2人
12	S 恵美子	福岡	結婚、農業
13	S 和子	宮城	小学校教員、結婚、子供は1人
14	S 安子	千葉	クリーニング業、結婚、子供は2人
15	S 栄子	福岡	結婚、子供は2人
16	T 栄子	アメリカ	
17	T 和子	広島	結婚、夫は会社員、子供は3人
18	T 雅子	東京	小学校教員、夫は小学校教員、子供は2人
19	T 綾子	埼玉	
20	T 和子	福岡	結婚、夫は会社員、子供は3人、後に下宿屋
21	T 貞子	埼玉	小学校教員、夫は教員、子供は2人
22	N 茂子	福岡	一人暮らし
23	N 寿美	福岡	福岡第一高女に編入、福岡女専卒業、中学校教員、夫は高校教員、子供は2人
24	N 美代子	奈良	結婚、夫は銀行員、主婦、子供は2人
25	H スナエ	神奈川	小学校教員、主婦、子供は2人
26	H 和子	福岡	鮮魚商、結婚、子供は3人
27	M 和子	東京	小学校教員、結婚、子供は2人
28	M 慶子	大分	農業
29	Y 登美子	高知	高知師範に編入、小学校教員、結婚、夫は教育委員会に勤務、子供は3人
30	Y 美奈子	鳥根	結婚、兼業農家、子供は3人
31	R アヤ子	熊本	結婚、子供は2人

明鏡会本部『明鏡』11号（同会、1998年）21～23頁、『清涼』1～9号（1967年1月～1980年7月）から作成。姓は仮名とした。

尋常科八期生（一九四五年四年在学）の会報『清涼』を通じて、彼女たちの戦後の足取りを見てみよう。表5は、尋常科八期生の会員三一名の一覧である。これ以外に、消息不明者は一三名、死亡者は四名であり、日本人は計四八名だった。⁵³ 会員は一九四五年に四年生在学中であったため、京城女子師範の卒業証書を得ることができなかった。住所を見ると、三二名中で福岡県が六名と最も多く、次いで千葉県が三名、高知県が三名となる。彼女たちの多くは結婚をしているが、一人暮らしも一名いる。職業は八名が教員（小学校、中学校）であるが、三二名中の二五・八％にすぎない。教員以外では、会社員、保健婦、養鶏業、クリーニング業、鮮魚商等がある。

尋常八期生の同窓会活動で大きな役割を果たしたのは、恩師の中島モモエである。中島は『清涼』第一号で、会員を「二度と繰り返したくない、悪夢のようだった終戦後の暗い日々に耐えて、お互い、よく生きて来ましたね。そこには、ずいぶん苦難の日々があったことと思いますが、大陸育ちのたくましい根性でやりぬいて、今は、家庭に職場に、それぞれ所を得ておられることと思います⁵⁴」とやさしく励ました。

会員との連絡が取れて、喜ぶ声が多い。畠山スナエは「あまりにもなつかしくて、何からおたよりに書いたらいいのかわからないくらいでございます。皆様よく御無事でーと、ひとりひとりのお名前の上に、あの頃のお顔が重なります⁵⁵」と述べた。また、高田和子は「おなつかしいお名前、ひとりひとりの顔がはつきりと目に浮かびます。学校で、寮でのあの時この時のことが。韓国との連絡もついたとのこと、ほんとうにうれしゅうございます⁵⁶」と述べている。また同窓会での友人との再会は、大きな喜びとなった。田尻和子は、「八期生だけで一つのテーブルを囲み、演壇に

我等の中島先生を仰いだとき、もう完全にあの赤れんがの校舎に帰ったこちでした。止めどもなく涙にむせびながら、思いつき校歌を歌いました。清涼台に整列して朝の冷たい空気を胸一杯に吸いながら、朝礼を受けている思い⁵⁷と書いている。

(4) 韓国・京城女子師範学校の同窓会

韓国には京城女子師範の卒業生がおり、彼女たちも同窓会を組織した。八月一日以降、京城女子師範は大きな変化に直面した。九月になると街角の電柱に「女子師範生登校せよ」のポスターが貼られた。これに気がついた学生は京城女子師範に戻り、一九四六年三月に卒業した。一九四五年八月に四八名いた四年生中で卒業したのは他校から転校した人も加え、二九名だけだった。後に生徒数の補充のため、公州師範、京畿高女から学生を受け入れた。さらに女子師範学校令により、本科・講習科の生徒は自動的にソウル大学に編入され、尋常科の生徒は小学校勤務ならできることになった。一九四六年の卒業後、無試験の特典を利用してソウル大学校師範学部に進んだ者もいた⁵⁸。

戦後の朝鮮人の立場は日本人と較べて、さらに過酷だった。京城女子師範の韓国代表は、一九八六年に「わが国では、韓国戦争、政治的変革、経済建設等、身も心も粉にして生き抜いて参りました⁵⁹」と回顧している。しかし、それでも京城女子師範は戦後、ソウル大学校師範学部となったため、彼女たちにとって母校は残った。

表 6 は韓国・京城女子師範学校同窓会の名簿である。合計三五七名となる。名簿の備考や住所から会員の職業を明らかにしたのが表 7 である。三五七名中の一一一名(三九・五%)に過ぎないが、一定の傾向はうかがえるだろ

表 7・韓国・京城女子師範
学校卒業生の職業
(1971年)

順番	職業・役職	人数
1	国民学校教員	64
2	国民学校教頭	18
3	中学校教員	7
4	高校教員	7
5	医者	7
6	大学教員	5
7	国民学校校長	5
8	幼稚園園長	3
9	中学校校長	2
10	高校校長	2
11	中学校教頭	2
12	教育委員会	2
13	薬局	2
14	大学学長	1
15	孤児院長	1
16	教会	1
17	特殊学校教員	1
18	託児所	1
19	保健局	1
20	政治家	1
21	農園	1
22	文教部奨学官	1
23	文教部奨学士	1
24	弁護士	1
25	洋装店	1
26	東洋織物	1
27	YMCA	1
28	学院	1
合計		141

京城女子師範学校『同窓会名簿・1971年度』（同校、1971年）から作成。

表 6・韓国・京城女子師範学校
同窓会名簿（1971年）

種類	所属	卒業年	会員数
1	尋常科 1 期	1939	6
2	尋常科 2 期	1940	16
3	尋常科 3 期	1941	23
4	尋常科 4 期	1942	22
5	尋常科 5 期	1943	19
6	尋常科 6 期	1944	26
7	尋常科 7 期	1945	17
8	尋常科 8 期	1946	20
9	尋常科 9 期	1947	15
10	演習科 1 期	1936	23
11	演習科 2 期	1937	19
12	演習科 3 期	1938	15
13	演習科 4 期	1939	24
14	演習科 5 期	1940	19
15	演習科 6 期	1941	3
16	演習科 7 期	1942	16
17	演習科 8 期	1943	20
18	本科 1 期	1944	7
19	本科 2 期	1945	2
20	本科 3 期	1946	3
21	講習科 1 期	1936	3
22	講習科 2 期	1937	15
23	講習科 3 期	1938	11
24	講習科 4 期	1939	9
25	講習科 5 期	1940	5
26	講習科 6 期	1941	4
27	講習科 7 期	1942	2
28	講習科 8 期	1943	4
29	講習科 9 期	1944	6
30	講習科 10 期	1945	1
31	講習科 11 期	1946	5
合計			357

三九四

京城女子師範学校『同窓会名簿・1971年度』（同校、1971年）から作成。

う。最も多いのは国民学校教員が六四名、次いで同校教頭が一八名、中学校教員が七名、高校教員が七名、医者が七名となる。全体的に教育関係者が多いのが特徴である。

アンケート調査によれば、韓国の会員が在学中に「厳しかった」と思う規則は、日本語使用が一八名、服装端正が一四名、時間厳守が一〇名、通学生の一停留所の距離歩きが九名、生活規則が七名、寮規則が七名、礼儀厳守が六名、「皇国臣民」精神強要が五名、手紙検閲が四名、勤労奉仕が四名等である。⁶⁰ 日本語使用が一位であるように、京城女子師範における民族的な差違は大きかった。

おわりに

以上の内容を要約すれば、次の通りである。

京城女子師範学校は一九三五年四月に開設され、尋常科、演習科（後に本科と改称）、講習科の三科を置いた。開学時には七クラスがあり、学生数は三七四名だった。朝鮮人は二〇五名、日本人は一四〇名であり、朝鮮人の比率が高かった。敗戦直前になると、戦時的な教育が行われた。授業は中止となり、看護実習、雲母剥ぎ、農業実習を行った。八月一五日の日本の敗戦により、京城女子師範学校の学生は学校からそのまま帰宅した。各地で教壇にあった卒業生も大きな衝撃を受けた。在校生、卒業生は困難な過程を経て、日本へ引揚げた。

京城女子師範の同窓会である明鏡会は一九四六年二月に最初の会合が持たれ、福岡、東京、広島、長崎、佐賀など、

西日本を中心に組織が形成された。これを受けて、一九六八年八月に第一回全国大会を開催した。これ以降三年おきに、一一回にわたって全国大会を開催した。一九八九年の第八回大会には最高の五七七名が参加した。一九八〇年代からは、韓国人も全国大会に参加するようになった。一九八四年にはソウル市で第一回韓日合同大会が、一九九七年には横浜市で第二回日韓合同大会が各々開催された。この時のスローガンは、「友情は国境を越えて」だった。また、明鏡会は博多港引揚記念碑建立・引揚資料館建設運動にも参加した。同窓生の一人である杉山とみは、「関釜裁判」の証人として法廷に立った。

明鏡会の本部は福岡（後に東京）に置かれ、会長以下の役員を置いた。本部の重要な仕事は名簿『明鏡』の発行と、会報『明鏡だより』の刊行だった。会員数は一九九二年が最高の一三五九名だった。しかし、会員の高齢化に伴い、明鏡会は二〇〇八年一二月に解散を決定した。明鏡会は全国に地方別・県別の支部を置いた。支部では九州支部が三一・六％、県別では福岡が一・九％と最も高かった。同期生たちは各々会合を行い、会報を出した。尋常科八期生は『清涼』を刊行し、親交を深めた。韓国には三六七名の同窓生がいた。彼女たちは国民学校教員や同教頭、中学校や高校教員など、教育関係者が多いのが特徴だった。

補注

1 加藤聖文監修・編『海外引揚関連史料集成』全三三巻・補遺二巻（ゆまに書房、二〇〇二年）。

- 2 引揚げに関する最近の研究として、若槻泰雄『戦後引揚げの記録』(時事通信社、一九九一年)、浅野豊美監修解説・明田川融「訳」故郷・帝国の解体―米軍が見た日本人と朝鮮人の引揚げ』(現代史料出版、二〇〇五年)、加藤聖文『大日本帝国』崩壊―東アジアの一九四五年』(中央公論社、二〇〇九年)、田中宏巳「復員・引揚げの研究―奇跡の生還と再生への道」(新人物往来社、二〇一〇年)、蘭信三編『帝国崩壊とひとの再移動―引揚げ、送還、そして残留』(勉成社、二〇一一年)、高杉志緒『日本に引揚げた人々―博多港引揚者・援護者聞書』(図書出版のぶ工房、二〇一二年)、増田弘編著『大日本帝国の崩壊と引揚・復員』(慶應義塾大学出版会、二〇一二年)等がある。
- 3 咲本和子「皇民化」政策期の在朝日本人―京城女子師範学校を中心に』『国際関係学研究』(津田塾大学) 二五号(一九九八年六月) 七九〇―九四頁、朴永奎「京城女子師範学校について―卒業生アンケートを中心に』『九州教育学会研究紀要』二九号(二〇〇一年六月) 二五九―二六六頁がある。聞き取りは、森下昭子「京城」での暮らしと博多港引揚、前掲書高杉志緒『日本に引揚げた人々』二三―四四頁。また、在朝日本人の意識については、曹龍淑「在朝日本人二世の朝鮮・朝鮮人に対する意識形成の研究―在釜山日本人を中心に』『アジア社会文化研究』四号(二〇〇三年三月) 参照。
- 4 京城女子師範学校『官立京城女子師範学校一覽』(同校、一九三五年) 一―四二頁。
- 5 野村寿美子「京女師の卒業生として」、明鏡会本部編『めいきょう』第一集(同会、一九八〇年) 一〇七―一一〇頁。
- 6 京城女子師範学校朝鮮教育研究会編『国民教育実践の根底』(同校、一九四四年) 参照。
- 7 前掲論文森下昭子「京城」での暮らしと博多港引揚、前掲書高杉志緒『日本に引揚げた人々』二三―四四頁。
- 8 蓑原昭子「終戦前後の思い出」、前掲書『めいきょう』第一集、一二三―一二六頁。
- 9 前掲論文森下昭子「京城」での暮らしと博多港引揚、前掲書高杉志緒『日本に引揚げた人々』二三―四四頁。
- 10 大谷マツヨ「無題」、京城女子師範学校尋常八期生「清涼」五号(一九七〇年九月) 九頁。
- 11 熊谷佳子「南朝鮮」からの引揚げ―帝国を移動した私たちの家族」、前掲書『帝国の崩壊とひとの再移動』四二―四七頁。

- 12 松田和子「構成劇台本・母校の思い出」『明鏡だより』最終号（二〇〇八年二月五日）一七〜一八頁。
- 13 川崎義子「マダム タワイ」、前掲書『めいきょう』第一集、五六〜五九頁。
- 14 杉山とみ『ゆく言葉が美しくて』（五十嵐寛、一九八九年）五七〜五八頁。杉山は京城女子師範を卒業後、大邱の達城国民学校に勤務した。その後、一九四四年一月から三月まで京城女子師範本科研究科に在籍した。杉山とみ「韓国の教え子」、前掲書『めいきょう』第一集、七二〜八一頁。一九九六年一月、杉山の達城国民学校時代の教え子である徐永徳が訪日し、約五〇年ぶりに再会した。杉山とみ「大合唱のように——日韓交流」『明鏡だより』一一号（二〇〇〇年一月二〇日）一二頁。また、杉山とみ述・本間千景記録・申鎬訳「스기야마 토미 杉山とみ 一九二二年七月二五日生」（立契、二〇一一年）は誕生から朝鮮での生活、引揚げ、日本での生活に及ぶ詳細で、貴重な記録である。
- 15 古橋利子「南大門は朝鮮服でうまった（京城）」、河邑厚徳編著『昭和二十年夏の日記』（博文館新社、一九八五年）四二〜四四頁。古橋は日記を京城女子師範の卒業時のサイン帖（寄せ書き）の間に書き、これを日本に持ち帰った。
- 16 高島保子「錦江は今も」、前掲書『めいきょう』第一集、九〇〜九二頁。
- 17 野村寿美子「京女師の卒業生として」、前掲書『めいきょう』第一集、一〇七〜一〇九頁。
- 18 京城女子師範生徒・卒業生の引揚げの事例については、以下を参照。田中節子「わが人生の一頁」、前掲書『めいきょう』第一集、九八〜九九頁。丸山須恵「教師生活回想記」、前掲書『めいきょう』第一集、一一七〜一二〇頁。覚幸留子「赤子を背に決死の38度線脱出」、前掲書『めいきょう』第一集、一三六〜一四八頁。前掲論文熊谷佳子「『南朝鮮』からの引揚げ——帝國を移動した私たちの家族」、前掲書『帝国の崩壊とひとの再移動』四二〜四七頁。前掲論文森下昭子「『京城』での暮らしと博多港引揚げ」、前掲書高杉志緒『日本に引揚げた人々』二三〜四四頁。
- 19 糸島範一「さよなら鳥飼レディ」、鳥飼里の会編『創立七十年福岡県女子師範学校誌』（同会、一九七二年）一三一〜一三三頁。福岡県立女子師範学校は一九四九年六月に福岡学芸大学（後に福岡教育大学と改称）に統合された。この間の経緯については、

- 福岡教育大学創立四〇周年記念行事実行委員会編『福岡教育大学四十年の歩み』（同大学、一九八九年）参照。
- 20 永島広紀「朝鮮半島からの引揚と「日本人世話人会」の救護活動」、前掲書増田弘編著『大日本帝国の崩壊と引揚・復員』一四五～一四七頁。
- 21 「年表」、明鏡会本部『戦後明鏡会のあゆみ』（同会、一九九五年）一二～一七頁。
- 22 堀越恭子「明鏡会を七回開くまでの経緯」、前掲書『戦後明鏡会のあゆみ』四五頁。
- 23 「大会の思い出」、前掲書『戦後明鏡会のあゆみ』三四頁。
- 24 岡本文子「蔭の力」「明鏡だより」一九八六年五月二五日、二頁。
- 25 黄順姫「同窓会の社会学——学校的身体文化・信頼・ネットワーク」（世界思想社、二〇〇七年）七頁。
- 26 『京城女子師範学校第一一回明鏡会全国大会』（明鏡会、一九九八年）一頁。
- 27 金真実「岡山大会によせて」「明鏡だより」一九八九年九月二八日、五頁。
- 28 金玉成「岡山大会によせて」「明鏡だより」一九八九年九月二八日、五頁。
- 29 松田和子「明鏡会の解散にあたって」「明鏡だより」最終号（二〇〇八年二月五日）二頁。
- 30 松田和子「明鏡会の解散にあたって」「明鏡だより」最終号（二〇〇八年二月五日）二頁。
- 31 中島モモエ「韓国に招かれて——里帰りの記」（同人、発行年不明）一～一七頁。
- 32 「第二回全国大会——於大阪」「明鏡便り」二号（一九七二年二月三日）一頁。
- 33 文純『「あいさつ」一九七一年八月二三日。
- 34 前掲論文松田和子「構成劇台本・母校の思い出」「明鏡だより」最終号（二〇〇八年二月五日）一三～一四頁。
- 35 「参加してよかった」「明鏡だより」一九九四年九月一日、五～六頁。
- 36 「あとかぎ」「明鏡だより」一九九五年八月二日、二〇頁。

- 37 松田和子「ご挨拶」、前掲書『戦後明鏡会のあゆみ』一一頁。
- 38 明鏡会福岡支部「運動経過報告資料」（同支部、発行年月不明）。
- 39 前掲書『戦後明鏡会のあゆみ』五一頁。
- 40 福岡支部特別委員会「引揚記念碑・資料館建設・記念植樹推進運動の報告」、明鏡会『第一一回明鏡会全国大会』（同会、一九八八年）一九～二五頁。
- 41 「本部から」「明鏡だより」一一号（二〇〇〇年一月）二七頁。博多港引揚関連資料については、福岡市保健福祉局総務福祉課編『博多港引揚資料目録』（同課、二〇〇一年）がある。
- 42 朴小得「最終意見陳述」、「閔釜裁判ニュース」二二号（一九九七年一月一六日）五～六頁、戦後責任を問う・閔釜裁判を支援する会編『閔釜裁判ニュース―釜山従軍慰安婦・女子勤労挺身隊公式謝罪等請求事件・一九九三～二〇一三』（同会、二〇一四年）。（以下、『閔釜裁判ニュース』とする）。朝鮮人女子勤労挺身隊の実態と証言は、日帝強占下強制動員被害真相究明委員会「朝鮮女子勤労挺身隊方式에 의한 勞務動員에 관한 調査」（同会、二〇〇八年）、同「朝鮮女子勤労挺身隊、二経験과 記憶」（同会、二〇〇八年）参照。後者には不二越富山工場に動員された二三名の証言が掲載されている。
- 43 「証人尋問要旨」、「閔釜裁判ニュース」二〇号（一九九九年五月二五日）五～八頁、前掲書『閔釜裁判ニュース』。
- 44 「第十八回口頭弁論」、「閔釜裁判ニュース」二〇号（一九九九年五月二五日）四頁、前掲書『閔釜裁判ニュース』。
- 45 前掲書杉山とみ述・本間千景記録・申鎬訳「스기야마 토미 杉山とみ 一九二二年七月二五日生」二四九頁。
- 46 花房俊雄「はじめに」、前掲書『閔釜裁判ニュース』一頁。
- 47 「年表」、前掲書『戦後明鏡会のあゆみ』一八頁。
- 48 「東京に本部が移ったこと」、前掲書『戦後明鏡会のあゆみ』五一～五四頁。
- 49 松田和子「明鏡会の解散にあたって」『明鏡だより』二〇〇八年二月五日、二頁。

- 50 「岡山大会準備会―電話と手紙で一問一答」、前掲書『戦後明鏡会のあゆみ』四〇頁。
- 51 「京都大会を終えて―ご苦労さま座談会」『明鏡だより』一九九二年一月五日、一一―一二頁。
- 52 「年表作成を終わって」、前掲書『戦後明鏡会のあゆみ』三三三頁。
- 53 明鏡会本部『明鏡』一一号(同部、一九九八年)二二―三三頁。
- 54 中島モモエ「無題」『清涼』一号(一九六七年一月)一頁。
- 55 畠山スナエ「無題」『清涼』一号(一九六七年一月)二―三頁。
- 56 高田和子「無題」『清涼』一号(一九六七年一月)四頁。
- 57 田尻和子「無題」『清涼』四号(一九六九年二月)五頁。
- 58 前掲論文松田和子「構成劇台本・母校の思い出」、『明鏡だより』二〇〇八年二月五日、二〇頁。
- 59 曹鳳子「大会での挨拶―日本の皆様へ」『明鏡だより』一九八六年五月十五日、三頁。
- 60 前掲論文朴永奎「京城女子師範学校について―卒業生アンケートを中心に」『九州教育学会研究紀要』二九号(二〇〇一年六月)二六〇頁。